

独特の臭気で吐き気を覚えた。大きな門を入り尋ねましたら、建物から中隊長（上官）が出て来て挨拶したら“お気の毒でした”と言われて、やっぱり死んだのだと思いました。次に“かなりの怪我をして、青ざめているが生きています”とのことでホッといたしました。しばらくして夫と会えました。夫に連れられて板の間の部屋に案内された兵舎の一室に座り込み無事を確かめ合い、私は腹の調子が悪く下痢をして食事も出来ない状態でしたが、夫から原爆が落ちるのを見ていて、被爆したとか、爆風で一時失神したとか状況を聞きました。飛行機の飛んでいるのを見ていて、ピカッと光ったのや、手、手首、腕、背中にガラスの破片が突き刺さったとか、色々語り合い、袖をまくり手首が腫れ上がっている

のを見せてくれました。夫は泊まっていた様になりますが、どうしたか定かでないが、帰りも、夫を残して、広島、尾道、今治と同じ経路で帰り、夫の父母、私の父母に夫虎夫の無事を報告して、疲れと安心感で数日寝込んだ様に思います。

夫は二、三ヶ月して帰って来ました。私の記憶では蜜柑が色付き始めた頃で、夫が蜜柑を割っているのを見て、まだ青いのにと言った記憶がありますので、九月の下旬か十月の初めの除隊と思います。

吉田虎夫の原爆手帳は区分1号被爆場所霞町2・7キロ二十一歳番号0155697で私トモヨのは区分2号入市、比治山町 二十一歳番号0155689となっています。

私と一緒に入市した実姉岡田トラヨは申請当時は、既に四国にいな

ったので、一緒に申請せずじまいでガンで四十二歳で死亡しています。この様に被爆者でありながら、生活の忙しさと、放射能の恐ろしさを隠しての政策のためか、被爆者としての扱いのない人達が沢山おられる様です。私は夫に教えられて、西条保健所で手続きしましたが、姉は、もうその時は西条にいませんでしたので、手続きをしようとした時には、ガンで亡くなっていました。悲しいことです。もっと早く制度が出来たらと歯がゆく悲しいです。

私と子どもは、幸いにしてどうか元気でしたが、夫の虎夫は勤めを何度も病気の為に代わりながらも、私達を守り、育ててくれましたが、ガンで亡くなりました。数年前からやっとなんか検診が、被爆者の検診に取り入れられましたが、春秋の検診